さくらさけ

館薙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さくらさけ

【Ｎコード】
Ｎ６１５５Ｄ

【作者名】
館薙

【あらすじ】
久しぶりに故郷の田舎町へと帰ってきた桜は、町を出るときに別れた昔の彼氏と出会う。いまだに忘れられない想いを抱えた桜は……。

「懐かしいな……」
数年前と変わらない光景で出迎えてくれた故郷に、私は思わずそう呟いた。
小高い丘へ続く、桜並木ぐらいしか自慢のない、静かな町。
私はここに、沢山のものを置いてきた。
親を、兄弟を、そして恋人を。
私が最後に見た故郷の風景は真っ白な雪景色だったけれど、今のこの町は新緑に彩られている。
桜の季節が終わって、夏へと移りゆく景色だ。
「柳也(りゅうや)……帰ってきたよ、私」
駅舎から出た私は、彼の実家がある方角に向けて笑顔を見せる。
彼が大好きだと言ってくれた笑顔。上京してからは辛いことの連続で、しばらく笑い方を忘れてしまっていた。
「桜(さくら)……？」
「え？」
振り返ると、そこには白衣を着た男の人がいた。
少しやつれたみたいだけど、すぐに彼だとわかった。
彼の目は驚き、戸惑っている。きっと、私も同じ顔をしているに違いない。
「お帰り、桜」
「う、うん……」
笑顔で挨拶をするって、決めていたのに。
予期せぬ再会に、私はそんな曖昧な台詞しか出てこなかった。

「いつ帰ってきたんだ？」
「ついさっき」
「ずっとこっちに？」

「……ううん。しばらくしたら、戻るから」
「そっか……成功しているんだな」
「……」
野道を並んで歩きながら、そんな他愛の無い話をする。
だけど一方的に彼が喋っていて、私はそっけない返事しか返せていなかった。
話したいこと、聞きたいことも沢山あったはずなのに。
突然の再会が、いまだに尾を引いているのか。
それとも――後ろめたさが、私の口数を少なくしているのか。

思い出すのは、雪の積もった枯れ木の風景。
私は自分の夢の為に、彼を捨てた。
柳也の家はこの町で唯一の診療所で、あの時すでに彼も跡継ぎに決まっていた。
彼の人生まで犠牲にできない。
そう思った私は彼をあの桜の木の根元に呼び出して、東京へ行く決意を話した。
（確か……あそこで柳也と初めて会ったんだよね）
幹の根元に座って本を読んでいた私の反対側に、不良っぽい男がごろりと寝転がっていた。それが、彼との出会いだった。
そんな出会いを何度か重ねるうちに、私は彼と話をするようになり、そのうちに気が合い、付き合うようになった。
「ふぅ……」
告白をされたのも、あの桜の木だ。
あの頃は、まさかこんな風になるなんて思いもしていなかった。
ただ毎日が輝いていて、何もかもが喜びに満ちていた。

「あ……れ？」
ふと気がつくと、隣を歩いていたはずの柳也がいなくなっていた。
辺りを見回し、小高い丘へと続く並木道で、その姿を見つける。

「あ……」
「桜、こっち」
そういいながら手を振る。
「けど、そっちは……」
何も無い。春ならば桜の狂い咲く美しい景色が見れるだろうが、この時期は特に見るものが無い。それに何より――その道の先にある丘の頂上で、私達は出会い、別れたのだ。
その場所に自分から進んでいけるほど、心の準備は出来ていない。
「桜？」
「ごめん、柳也。私、そっちは……」
「ちょっとぐらい、いいだろ？　話、したいんだ」
「……うん」
寂しそうに微笑む彼に、私はつい頷いてしまった。

丘のてっぺんは、この町の全てを見渡せる開けた場所だ。
大きな桜の木が一本、新緑を飾っている。
何も変わっていない。この場所も、町も、全部昔のままだ。
「よっ、と……」
懐かしい景色を眺めていると、木をはさんだ向かい側に柳也は座り込んだ。
（あ……）
そこは、初めて会ったとき、彼が昼寝をしていた場所だ。
私も無言で、昔と同じように木の幹に背中を預けた。
空を仰ぐ。暖かいというよりも蒸し暑くなってきた日差しが、木漏れ日となって私の身体に降り注いでいる。
頬を撫でる涼風が心地良い。
「なぁ、桜……」
樹を挟んだ背中合わせのまま、柳也が呟くように声をかけてくる。
「俺は、さ。お前みたいに夢があるわけでもなくて、ただなんとなく親の後継いで、この町からほとんど出ることもなく、一生を終わ

らせていく……ずっとそんな風に思っていた」
「うん……」
「そんな俺だから、東京に行くんだって言うお前を止めることも、一緒に行くって言う事もできなかった。……悪かったって、思ってる」
「柳也が……謝ることじゃないよ」
心の底では、引き止めてくれるんじゃないかと期待していた。
けれど彼は何も言わず、私の一方的な言葉を受け入れただけだった。
「正直に言うとな、お前が羨ましかったんだよ。夢がある。目標がある。そういう桜は、いつもイキイキしてたから」
「……」
「ずっと応援していた。桜の夢は、俺の夢だ……って、いなくなったあと、気がついた」
「……」
「夢は……叶ったんだよな？」
「……うん」
私は、噛み締めるように彼の言葉を飲み込み、小さく頷いた。
柳也はほとんど一方的に振った私を咎めもせず、こうして優しい言葉を掛けてくれる。
「……急ぎすぎたのかな、私」
「うん？」
「夢、追いかけるの」
もっともっと、ゆっくり、それでも確実に進もうとしていれば、こんなことにはならなかったかも知れない。柳也と別れずに済んだのかも知れない。
でも、もう何もかもが遅い。
「柳也は、診療所を継いだんだよね？　ちゃんとやってる？」
「まぁ、な」
何やら困ったような、そんな曖昧な笑みを浮かべた。

「……うまくいってないの？」
「いや、そんなことはないよ。ただ……」
一瞬、何か言いよどんだように口ごもる。
けれど、すぐに顔を上げ、柳也は真っ直ぐ私を見つめてきた。
「もうすぐ、子供が産まれるんだ」
「え……」
「三年ぐらい前に結婚してて……ごめん、何も知らせず」
「そっ……か……」
自分でもわかるほど、声が落ち込んでいる。
……やだな。
柳也はずっと私を応援してくれていたのに。
私は、柳也に『おめでとう』も言えないなんて……。
「……やな女だよね、私」
「桜？」
「ね、柳也」
私はそっと目を閉じて、ここであった柳也との思い出を反芻する。
樹の幹に寄りかかって本を読んでいた私と、昼寝をしていた彼。
桜の木を挟んだ、背中合わせの告白。
雪景色の中、一方的に告げた別れの挨拶。
「幸せに、なってね」
子供が産まれることを祝福は出来ない。
柳也の幸せを願うのが、精一杯だった。
（ああ……）
また、一方的な挨拶をしちゃったな。
目の前が眩い光に包まれていく中で、私は最後にそんなことを思っていた。

＊　＊　＊

「……桜？」

背中に喪失感が走り、柳也は思わず振り向く。
桜の木を挟んだ向かい側の場所に、彼女の姿は無かった。
ついさっきまで話をしていたはずなのに、一体どこへ行ってしまったのか。
「……？」
はらり、と。
桃色の花びらが、柳也の視界を横切った。
「桜の……花」
見上げると、先程までは確かに新緑に染まっていた桜の木が、いつの間にか、見事な桜の花を咲かせていた。
彼女が一番好きだった、彼女の名前をした花だ。
ふいにそんなことを思い出し、なぜだか、言いようの無い哀しみが沸き起こった。

＊　＊　＊

冷たい風が吹いている。今年の冬を越していくつめの春を迎えただろうか。
それでも、この丘の桜は咲き続ける。狂い咲きの桜は、この町の新たな名所となっていた。
あちこちが観光用に開拓され、彼女と二人で過ごした日の面影は、もうほとんど残っていない。
「桜……」
あの日起こった事は、誰にも言っていない。
桜のことを調べる方法は沢山あった。けれど俺は何もしなかった。
本当のことがわかったところで、何がどうなるものでもないからだ。
だけど俺は毎年、彼女と再会し、もう一度別れたこの場所に、家族と一緒に来ている。
ヤキモチ焼きの彼女のことだから、もしどこかで見ていたら、き

っと膨れっ面をしているに違いない。けれど、きっと、微笑んでくれてもいるだろう。

（幸せそうな顔して……）

ため息交じりのそんな台詞が、風に乗って聞こえてきたような気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6155d/

さくらさけ

2010年10月8日15時08分発行